

# 小学校外国語活動から中学校英語へ —学習履歴をふまえた中学1年生の英語授業—

田中 秀太郎

2011年度より、小学5、6年生で年間35時間の外国語活動が必修化され、中学校に入学してくる生徒は、音声を中心に英語に慣れ親しんでいる。こうした背景をふまえ、英語学習におけるスムーズな小中間の接続とは何かについて考察する。生徒の英語学習に対する素地を十分に生かし、中学校でも英語に触れる機会を増やすように努めなければならない。本稿では、当校2016年度の中学1年生で実践した授業について報告する。

## 1. はじめに

2005年度にはじめて中学校の英語授業を担当し、元々高等学校の採用であった私は、以降2年間手探りで中学校の授業をしていた。今年度、10年ぶりに中学1年生の授業を担当する機会を得て、4月当初、授業をするたびに何とも言えない違和感があった。「今の中学生は英語に慣れている」といったことを感じたのを覚えている。これは、当時勤務していた佐賀県の中高一貫校と当校の生徒との違いだけではないと思った。10数年前になくて今あるもの、それは小学校での外国語活動である。

2008年3月28日『改定小学校学習指導要領』が公示され、小学校5、6年生が、年間35時間の外国語活動の授業を受けることになった。つまり、中学校に入学してくる生徒は、70時間の外国語活動を経験していることになる。実際は、当校中学1年生の大半が小学5年生以前から、授業として外国語活動を経験しているようである（表1参照）。「英語を使ったゲーム」、「簡単な英会話」、「英語の歌」などを体験し（表2参照）、その活動内容や英語に対しておおむね肯定的にとらえている生徒（表3、4参照）が、できるだけスムーズに中学校英語の学習を開始できるには、どのような授業がよいのだろうか。本稿では、今年度担当している中学1年生のうちの2クラス（81名）で、第1、2学期に実践した授業について報告する。

「外国語活動に関するアンケート」（2016年4月実施、人数：中学1年生81名）より

表1

質問 あなたの出身小学校で、外国語活動の授業が始まったのは、いつですか。（注）個人の習い事ではありません。

1年	2年	3年	4年	5年	6年	未回答
31名	1名	10名	5名	32名	0名	2名

（備考）1年～4年と回答した中には、「不定期に」授業が行われていたものも含まれる。

表2

質問 外国語活動の授業では、どのような活動をしましたか。（複数回答可）

英語を使ったゲームをする	78名
簡単な英会話をする	70名
英語の歌を歌う	70名
アルファベットを学ぶ	55名
日本と外国の違いなどを学ぶ	54名
英単語や英文について学ぶ	27名
英語の映画を観る	12名
その他	8名

（備考）「その他」の例：「英語劇」、「留学生との交流」、「実況放送（英語）などの聞き取り」

表3

質問 外国語活動の授業について、あなたはどのように感じましたか。

楽しかった	51名
どちらかと言えば楽しかった	24名
どちらかと言えば楽しくなかった	4名
楽しくなかった	2名

表4

質問 あなたは、英語は好きですか。

好き	39名
どちらかと言えば好き	30名
どちらかと言えば好きではない	10名
好きではない	2名

## 2. 外国語活動の目標と内容

担当する生徒の学習履歴を把握するため、小学校における外国語活動について、基本的なことを整理しておきたい。

まずは、小学校の外国語活動の目標についてである。

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

これを分析的に見れば、目標は次の3つの柱から成り立っている。

- ① 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③ 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

内容については、外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図る態度の育成に関するものと、日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための内容との2つである。目標にある「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませ」ることは、日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めさせる内容の中に含まれている。

#### (1) 言語や文化を体験的に学ぶことについて

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めることについて、言語間や文化間の類似点や相違点は、活動を通して気づかせていくということであろう。つまり、知識を教え込むというよりは、体験的に理解させるという視点が重要である。例えば、児童はじゃんけんをすると、日本語のグー、チョキ、パーと英語の Rock Paper Scissors では順番が違うことに気づき、体験的に理解することになる。

扱える言語や文化の内容についても、小学校と中学校で異なる点がある。言語について言えば、目標の中で、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることがあげられているため、音声に関する気づきが外国語活動では中心となる。『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』（文部科学省、2008年）によれば、「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気づくこと」について、日本語と英語の音声の違いとして、リズム（例：アップルと apple、バレーボールと volleyball など）、イントネーション、日本語にない音（例：[æ] や [θ]）などがあげられている。また、中学校英語の場合と異なり、文字や文法事項などの言語材料が明示されていないことに留意したい。

扱える文化については、中学校英語では、題材として「英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統

文化や自然科学などに関するものの中から、生徒の発達段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げる」（文部科学省、2008年）ことができるが、指導し評価する対象としては、言語活動を行う上で必要な文化的な知識・理解であるとされている。一方、外国語活動で扱う文化の内容は、「日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気づくこと」（文部科学省、2008年）とされており、比較的多種多様な文化的な内容を取り上げることができる。

#### (2) コミュニケーションを図ろうとする態度の育成について

外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することは、外国語活動、中学校・高等学校英語科の目標の中で共通に述べられている。それぞれの発達段階に応じて、どのような態度が求められているのかを理解する必要がある。

外国語活動では、「コミュニケーションを図ろうとする態度」とは、積極的に英語で話しかけたり、積極的に英語を聞こうとすることであろう。例えば、「買い物」についての会話で、次のようなやり取りを行うとする。

店員：Hello.

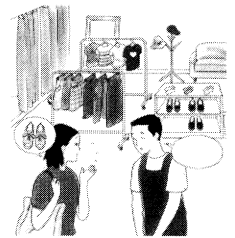
客：Hello. Do you have yellow shoes?

店員：No, I don't. I don't have yellow shoes.

客：Do you have blue shoes?

店員：Yes, I do. Here you are.

客：Thank you.



（『英語ノート1』p.33より）

店員は、大きな声で話し、客の求めているものをきちんと聞いて接客しなければならない。客に対しては、アイコンタクトで誠意をもって応じ、黄色い靴がない場合の答え方を知っておく必要がある。ジェスチャーなどを使ってもよい。一方、客は自分の求めているものを明確に伝え、サービスしてくれた店員に対して、最後は“Thank you.”と言って、感謝の気持ちを伝えている。もちろん、店員同様、アイコンタクトなど言語以外のコミュニケーションも重要な要素となる。

中学校英語では、聞いたり話したりすることだけでなく、読んだり書いたりすることにおいても、コミュニケーションを積極的に図ろうとする態度を「言語活動への取り組み」（例：意欲的に話そうとしているか）と「コミュニケーションの継続」（例：わからない単語があっ

でも、辞書を活用して読もうとしているか) の点からとらえようとする。外国語活動で扱われるアイコンタクト、ジェスチャー、大きな声、また、他者と関わろうとする姿勢は、話すことについての言語活動への取り組みとしてとらえることができる。

### (3) 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことについて

外国語活動の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる状態とは、英語を聞いていても児童が違和感を持つことなく活動に取り組んでいる状態であると言える。外国語活動の授業では、児童に英語を「学ぶ対象として」教えているのではなく、「コミュニケーションの道具として」触れさせている。つまり、毎回の授業の中で、教員はできるだけ英語を話し、英語によるコミュニケーションを児童に多く体験させている。

外国語活動で使用される表現例：

- ・ What's your name? — My name is ~.
- ・ Nice to meet you.
- ・ How are you? — I'm happy.
- ・ How many? — Five.
- ・ Do you like apples? — Yes, I do. / No, I don't.
- ・ I like bananas. / I don't like blue.
- ・ What do you want? — Melon, please.
- ・ What's this? — It's a pencil.
- ・ I study Japanese.
- ・ What would you like? — I'd like juice.
- ・ When is your birthday? — My birthday is March 3rd.
- ・ Can you swim? — Yes, I can. / No, I can't.
- ・ I can swim. / I can't swim.
- ・ Where is the flower shop?
- ・ Go straight. / Turn right/left. / Stop.
- ・ I want to go to Italy. / Let's go.
- ・ What time do you get up? — At 7:00. / I go to bed.
- ・ Please help me.
- ・ What's the matter?
- ・ What do you want to be? — I want to be a teacher.

(『英語ノート1 指導資料』pp.6~7より)

中学校英語でも、生徒に英語によるコミュニケーションを多く行わせることが求められている。いわゆる言語活動の充実である。外国語活動では、音声を中心としたコミュニケーションが行われるが、英語によるコミュニケーション(言語活動)を充実させるという方向性は、中学校(や高等学校)と変わらないようである。

## 3. 期待される小中間の接続

中学1年生の指導に当たり、配慮事項として「小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されることをふまえ、身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行わせること。その際、自分の気持ちや身の回りの出来事などの中から簡単な表現を用いてコミュニケーションを図れるような話題を取り上げること。」(文部科学省、2008年)とされている。特に、中学校の初期指導では、外国語活動でどのような能力や態度を身につけてきたのかということ把握し、英語の指導に生かしていくことが重要である。

外国語活動を体験してきた生徒は、英語を聞くことに慣れていたり、外国や異文化に対する興味が高まっていたり、英語を話すことに対する抵抗感がなくなっていることが予想される。こうしたことをふまえ、次のようなことに留意しながら指導を進めていくことが重要であると考えられる。

- ① 音声から文字へという指導の流れを基本とする。
- ② 日本語による文法や構文の説明に終始する展開は、必要最小限にとどめる。
- ③ できるだけ生徒にさせてみて、体験させてから、その都度、必要な指導を行う。

## 4. 中学1年生の英語授業

以上①~③をふまえ、中学1年生の英語授業で継続的に取り組んできた4つの活動をあげてみたい。

### (1) 新出語句の指導

新出語句の指導と言えば、CD プレーヤーで生徒に音声を開かせ、一斉に発音練習や意味の確認をするのが主流である。教育実習では、フラッシュカードの代わりにパワーポイントでスライドを準備し、新出語句の指導をする場面がよく見られる。もちろんこれは大事であるが、長年、他の方法はないだろうかと考えていた。

そこで、新出語句の指導をする代わりに、生徒に辞書を持たせて本文を読ませたらどうだろうか。辞書を活用する力は将来も役に立つし、辞書を使うためには、本文中のわからない語句を自分で見つけなければならない。授業では、お互いが辞書を引いてわかったことについて、生徒同士で質問することができる。例えば、次のような質問を生徒に教えておくとよいだろう。

- ・ What's “~”? (~に聞きたい語/句)
- ・ What's the meaning of this word/phrase?
- ・ I don't understand ~. Please help me.

これは、授業中にスピーチの指導をしていたときの発見である。「夏休みの日記」というテーマについて、生徒は辞書を引きながら、自分の表現したいことを英語で書いた。

生徒のスピーチ原稿：

Saturday August 20<sup>th</sup>  
↑「曜日」を英語で書く。 ↑「月日」を英語で書く。

I went to trip to "Ise" with my family last Monday through Friday.  
The trip to "Ise" was my first experience.  
I went to many tourist resorts, and "Ise Jingu" was a most impressive place.  
"Ise Jingu" is a very famous shrine in Japan, and I thought that I want to go there by all means.  
The shrine was erected divided into "Geku" and "Naiku".  
I was able to get a very valuable experience.

辞書（特に、和英辞典）を使ってスピーチの原稿を書かせると、他の生徒にとって理解できない難しい語句が出てくることがある。「できるだけ簡単な表現を使って、聞き手にとってわかりやすく原稿を書きなさい。」というように、たとえ使用する語句に制限を設けて指導しても、結局テーマによってはそうならなくなる。

やがてグループ内でのスピーチが始まり、生徒は次のようなやり取りをしていた。

会話例 1：

A: What's "shrine"?

B: We have Itsukushima Shrine in Miyajima.

A: OK, I see.

→shrine の具体例をあげることで質問に答えている。

会話例 2：

A: What's the meaning of "all means"?

B: Oh, that's "by all means," right? "I want to go there by all means." is "I want to go there very very much."

→by all means を簡単な表現で言いかえている。

会話例 3：

A: I don't understand "erected." Please help me.

B: Well, it's ....

→これは難しい。語と語のレベルで書きかえると、

erect は build くらいに置きかえられるが、中学 1 年生で未習の受動態を使うとますますわかりにくくなってしまう。ここでは、文そのものを "The shrine has 'Geku (外宮)' and 'Naiku (内宮)'." とするとよい。

## (2) 生徒による質問づくり

本文を読んだ後、内容理解を確認するために T/F や Q/A 活動が行われる。多くの場合、こうした活動は、教員が準備するワークシートに生徒が答えを書き込む形式や、リスニングとして口頭で行われる形式が多い。しかしながら、現実的に私たちが何かの読み物をした後、与えられた質問に答えることは、資格試験などの問題集を除き、まれである。通常は、自分自身で何らかの問いを抱き、その答えを探りながら読み進めるものである。

読む本文の内容や種類によって、質問の内容も変わるが、本文を読ませた後、生徒同士で質問を考えさせてはどうだろうか。例えば、ペアワークであれば、お互いが考えた質問をノートに書き、交換し質問に答える活動がある。あるいは、生徒がこの活動に慣れ、習熟度を見ながら、口頭でペアまたはグループワークでもよいだろう。

生徒の考える質問を分類すると、次のようになる。

- ① 本文中に出てくる語句の意味を問うもの。
- ② 本文の内容を問うもの。
- ③ 本文の内容に関連することを問うもの。（オープンクエスチョン）

この活動を始めたころは、質問をつくることに戸惑っていた生徒も、回数を重ねるごとに多様な質問をつくるようになった。生徒の考える質問の中には、教員の発想にないようなものがある。また、私が聞きたいと思っていたことが、生徒がつくる質問の中に多く見られるようになった。

生徒がつくったオープンクエスチョンの例：

- ・ Ken が最後に言った "Oh." について、 "How do you say 'Oh.?'?" (Lesson 4 Part 2)
- 川にビニール袋が捨てられているのを見た Ken が、どのような気持ちでこのセリフを口にしたかという質問。
- ・ 転校してきた Raj について、 "Can you help Raj?" (Lesson 5 Part 1)
- クラスメートとして、Raj のために何かできることはあるだろうかという気持ちが込められている質問。
- ・ "What can we learn from 'Sports for Everyone'?" (Lesson 7 USE-Read)
- 体に障がいのある人も楽しむことのできるスポーツが紹介され、Everyone に込められた思いを考えさせる質問。(備考) ( ) 内は、使用教科書『NEW CROWN 1 New Edition』の単元を表す。

### (3) ジグソー法を活用したグループワーク

ジグソー法は、カリフォルニア大学サンタ・クルーズ校の名誉教授エリオット・アロンソンによって編み出された学習方法である。授業で行う活動では、4人を目安に1つのグループを作り、生徒がそれぞれ異なった情報を持ち寄り、ジグソーパズルのように組み合わせると全体像が見えてくる。

#### 例1:

次のような身の回りにある英語をカードにして、授業ではグループワークとして活動させる。教科書『NEW CROWN 1 New Edition』では、外国語活動と中学校英語をつなぐ Get Ready というコーナーがあるが、これと同様に初期指導で簡単にできる活動である。



#### 手順:

- ① 英語のカードを10~20枚くらい用意し、教室内の教箇所に分けて貼る。
- ② グループ内で順番を決めて、一人ずつ席を立ててカードを見に行かせる。
- ③ カードのつづりを覚えて、机上のワークシートに記入させる。ワークシートは机上に置かせ、つづりを暗記して帰ってくるが、何回見に行ってもよい。
- ④ 暗記した情報をグループのメンバーに口頭で伝えさせる。その際、生徒はアルファベットのつづりや大文字・小文字なども英語で伝えることになる。
- ⑤ すべてのカードが終わったら、頭文字をアルファベット順に並べさせる。(例: FamilyMart → McDonald's → SoftBank → UNIVERSAL STUDIOS JAPAN)

#### 例2:

ある程度分量のある英文を使って、グループ内で分担して読み進めながら、全体の内容を理解させるリーディング活動である。

基本的な手順は、例1と同様である。本文を4つに分けて教室内に貼り、机上のワークシートに取り組みさせる。ワークシートの質問は、英文を時系列に並べかえるもの

や、物語の要約文を空所補充にしたものなどが取り組みやすいだろう。もちろん、(2)で紹介した生徒による質問でもよい。その場合は、あらかじめ各グループでつくった質問に、他のグループの生徒が取り組むとよい。

この活動を始める前に、生徒各自にワークシートを使ってどのような話なのかを推測させ、グループ内で共有させるとコミュニケーション活動ができ、さらに効果的である。

"We asked Aesop about the food you had that day," her mother said. "We found you had had only usual food then. But he also told us you had happened to see human beings for the first time. You got excited to see a good-looking young fisherman. Is it true?"

"Oh, yes," said Florence. "I was impressed by the human beings. The young fisherman was quite different from the mermen I know. The upper half of the body is the same as ours. He looked much stronger than mermen and more handsome. I want to see him again."

Her voice was weak, but it showed how much she wanted to see the fisherman.

Her father said, "I think you've fallen in love with the man. The partner of your first love is not a merman but a human. What a shame!"

Then her mother cut in.

"You shouldn't scold her so hard. She is still very weak. It may be wrong of us to scold her this way. We have never discussed 'love' with Florence. We've always avoided it. Every young mermaid will marry a merman some day. It is our custom."

Florence spoke out when her mother took a pause.

"What's wrong with me if I marry the fisherman?"

"Just forget it," said her mother. "Throw away such a foolish idea. We should keep our customs. Everything in this world was arranged by God."

After her parents left her, she felt a little better since she had spoken out about her secret love. She began to get back her appetite.

(『人魚の冒険 A Mermaid's Adventure』第2章より)

### (4) 生徒による文章の共有

外国語活動で、音声を中心に英語に慣れ親しんできた生徒に対して、中学校英語の授業で、書く活動をどの程度取り入れていくかについては、最も留意してきたことである。はじめは、新出語句や本文を書き写す作業が主であったが、少しずつ生徒から、聞いたり読んだりしたことについて、自分の考えを英語で書こうとする意欲が感じられるようになった(次頁表2参照)。学習が進むにつれ言語材料が増えれば、自己表現をしたいと考えるのは当然かもしれない。

そこで、教科書の単元が終わるごとに、とにかく何かを生徒に書かせてみようとしてみた。生徒が書く文章は、考えを深めるための新たな教材になりうる。

例 1 (Lesson 6) :

There are four members in my family. My family consists of me, my wife, son and two daughters. We are from Scotland, but we live in London now. My job is to drive a taxi. I know every street in London. My wife is teaches art. She draws pictures very well. My son, Peter play cricket. He is a good cricket player. He love cricket. My daughter, Jean, is a musician. She plays the bagpipes at festival. She practices it every day. More one daughter, Brown teaches English to children in Japan. She is good at teaching it. I love my family.

→教科書の本文では、ブラウン先生が自分の家族(両親、弟、妹)を紹介しているが、これはブラウン先生の父親目線で家族を紹介する文章になっている。

例 2 (Lesson 8) :

I knew school life in the USA, but didn't know language art. I want to try it, because I want to read many books. I was surprised. Mike's cousin was studying Spanish. I want to speak Spanish. I didn't look at foot ball still. The picture, many people play it. I want to see and play it some day in the USA. So, I want to go to the USA!

例 3 (Lesson 8) :

I was suprized by in America, many people speak Spanish. I knew in America, don't use only English. I approve of American policy "Stand on your own two feet." I think Japanese people is too kind. It's good to all foreigner. But it's not good to Japanese, because it's lenient. I'm interested in diversity. Many people live in America. So, I thought "Agree to disagree" is important. I think "Now, America has to make the equal world. Diversity is very good. But I think, peace is important than it. I think, "White people have to be nice to black people."

→教科書の本文には、アメリカの学校生活について書かれており、生徒は自分の学校と比較しながら関心を高める。例 2, 3 とともに、単元を通して発見したことや気づいたことを書いている。

(備考) ( ) 内は、使用教科書『NEW CROWN 1 New Edition』の単元を表す。

## 5. おわりに

授業を通して、生徒が英語の学び方を身につけ、将来自分の考えを英語で発信することによって社会に貢献する能力を身につけることができる。そのような思いから、中学校英語の授業に取り組んできた。新しい試みは想定

以上の準備時間を要し、うまくいかない授業が増えることもある。しかし、結果的に、生徒が主体となって学ぶアクティブラーニングは、生徒を自律した学習者に育てるだけでなく、私たち教員に非常に多くのことを教えてくれるというメリットがあることに気づいた。

今年度、中学 1 年生で実践してきた授業には、改善の余地が十分ある。しかし、授業や英語に対して肯定的にとらえている生徒がいる(表 1, 3 参照)ことを励みに、これからもより一層私自身の授業改善に取り組んでいきたい。

「英語の授業に関するアンケート」(2016 年 12 月実施、人数: 中学 1 年生 80 名) より

表 1

質問 中学校での英語の授業について、あなたはどのように感じましたか。

楽しかった	36 名
どちらかと言えば楽しかった	39 名
どちらかと言えば楽しくなかった	5 名
楽しくなかった	0 名

表 2

質問 あなたが、英語の授業や自宅学習などで、最も興味をもって取り組んだ活動は、どれですか。

聞く活動	15 名
話す活動	19 名
読む活動	19 名
書く活動	27 名

表 3

質問 あなたは、英語は好きですか。

好き	32 名
どちらかと言えば好き	31 名
どちらかと言えば好きではない	15 名
好きではない	2 名

### 【参考文献】

- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東洋館出版社、2008 年
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂出版、2008 年
- ・渡邊時夫、高梨庸雄、齋藤榮二、酒井英樹『小中連携を意識した中学校英語の改善』三省堂、2013 年
- ・山本崇雄『はじめてのアクティブ・ラーニング! 英語授業』学陽書房、2016 年
- ・文部科学省『英語ノート 1 指導資料』2009 年